

アラカルト

火 育

水 医 療

シニア

食

旅・趣味

スタイル

導入した最新のMRIについて説明する荒木理事長
(広島市西区の荒木脳神経外科病院)



最新MRI 画像鮮明

民間病院でも初導入 広島

磁力を利用して体内を撮影する磁気共鳴画像装置(MRI)が進化している。より鮮明な画像で脳の血管の状態を確認できるため、脳梗塞など脳卒中の治療や、予防のための「脳ドック」への活用が期待されている。
(平井敦子)

広島市西区の荒木脳神経外科病院は今年、フィリップス社製の最新のMRIを導入した。これまでの機種は磁場の強度が1.5テスラだったが、新たに入れたのは2倍の強度の3.0テスラ。同病院によると、広島県内では広島大病院、県立広島病院(以上南区)、

脳ドックへの活用に期待

広島市総合リハビリテーションセンター(安佐南区)に続く4台目。民間病院では初めての導入となる。脳神経外科専門医師で医療法人光臨会の荒木攻理事長によると、これまでの機種で写し出せる血管の太さや動脈瘤の大きさは1.0ミリまでだったが、新しい機種は0.35ミリまで可能という。

脳を例に挙げると、より

検査受けるべき人は 広島大の松本教授に聞く

広島大学院の松本昌泰教授(脳神経内科学)に聞いた。
「なぜ脳ドックが必要なのですか。
脳梗塞、脳出血、くも膜下出血など脳卒中は、1分30秒に1人が発症しています。高齢者が介護が必要になる理由の1位

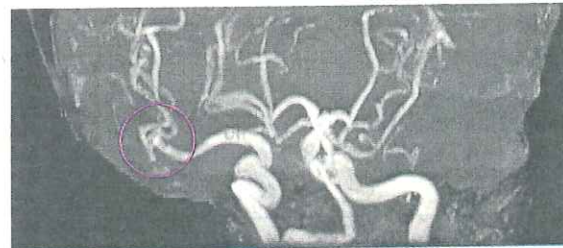
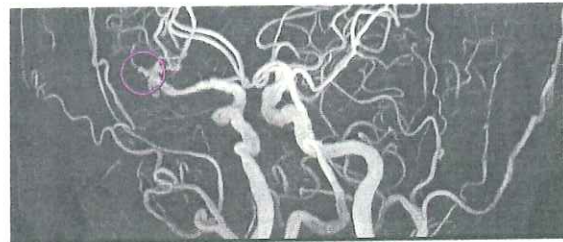


広島大学院の松本昌泰教授

MRIの普及により広がってきた脳ドック。どんな時に受ければいいのか。今年7月から日本脳ドック学会長に就任する

生活習慣病患者で40歳以上

しかし、MRIの登場により、造影剤なしでも検査が可能になり、比較にならないほど体の負担が減りました。MRIの精度も上がり、詳細な画像が写し出せます。技術の進歩を予防のために有効に活用すべきです。
「どんな時に受ければいいのですか。
死因の3位。その脳卒中発症の危険性を早期発見するツールが脳ドックです。
以前は、脳の血管の検査には造影剤の注入が必要で、頭部に強い痛みが生じました。「焼け火箸を突っ込まれたよう」と訴える患者もいました。
ただ、脳動脈瘤を発見し、たととしても、サイズや部位により破裂しにくいものもあり、手術を見送って経過を観察した方がいい場合もあります。適切な診断、治療が必要です。日本脳ドック学会は認定施設をホームページで公開しています。病院選びの参考にしてください。



同じ患者の脳動脈瘤を写し出したMRIの画像。上が3.0テスラの最新機種。下が1.5テスラの機種(荒木脳神経外科病院提供)

と確認できれば適切な診断、治療、予防につながる。と最新機種を導入した理由を説明する。より細かい画像を正確に読み取るため、外部の放射線専門医師に画像を送ってセカンドオピニオンを得る仕組みも取り入

れた。
MRIは、コンピュータ断層撮影(CT)装置と違って、放射線を使わない。また、造影剤を使わずに血管の状態を確認できるため、身体への負担が少なく、予防のための脳ドックにも向いている。
同病院には、プロ野球の広島東洋カープで活躍した木村拓也さんがくも膜下出血で亡くなった昨年4月から、脳ドックの問い合わせが相次いだという。荒木理事長は「最新のMRIを活用した脳ドックを充実させ、防げる病気を防ごうと呼び掛けていきたい」と話している。